俺ガイル×シュタゲ

綾小路王子

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大学生になった比企谷八幡は、入学式に高熱を出し欠席。一週間休みとなり、高校の二の舞に。

この作品はシュタゲの世界に俺ガイルのキャラが存在している作品です。

思い付きで書くため不定期です。

目　次

大学生になった比企谷八幡は　―――――――――――　1
やはり一色いろはと比企谷小町はあざとい　―――――――　3
このメンバーで集まる俺の大学生活は、やはりまちがっている。
6
雪ノ下陽乃は、人選をまちがえない。　―――――――――　9

大学生になった比企谷八幡は

季節は夏。太陽の熱と蝉の鳴き声で、頭がおかしくなりそうな、８月１日。

茹だるような熱気に耐えながら、家に向かって自転車をひたすら漕いでいた。

家に常備していたマッカンが一昨日切れてしまい、買いに行かないといけなくなったんだが、この間新作ゲームを買ったばかりで金欠な俺は、電車代を惜しんで自転車に跨がった。

「くそっ…土下座して電車代もらっときゃ良かった…！」

そう後悔しながら、数十分ほどで帰宅。

玄関を開けると、見知らぬ可愛らしい靴が並んでいた。

リビングからは何やら話し声が聞こえる。

小町が友達呼んだのか。そんなこと一言も言ってなかったけどなぁ。

とりあえず、汗だくだからシャワー浴びたい……。

「ただいま…」

独り言のように呟き、部屋に向かう。リビングに近づくにつれ、話し声がはっきりと聞こえてくるんだが、もう一人の声、めっちゃ聞いたことある声なんだが……。

※※※※※※※※※※

シャワーを浴びたし、部屋でゲームでもしますか……。

部屋に戻ると、机に置いてあるマッカンの箱が入った袋が目に入る。

あ、冷蔵庫に入れなきゃ…。

袋を掴み、リビングに向かう。

そういえば、さっきの声が聞こえんな。小町の部屋に移動したのか？

マッカンを冷蔵庫にしまい、代わりにお茶を取り出す。

コップに注いで、一気に飲み干す。

っっぱぁ～～～!!んめぇ～～!!運動後の一杯は最高だな！
さて、部屋に戻ってゲームの続きしなきゃ……。
リビングから出ると、目の前に女性が立っていた。
小町ではない。だが、懐かしい顔がそこにあった。自然と目が合う。

「……おう…いらっしゃい…」

「……先輩…」

聞こえてきた声で薄々は気づいていたから、さすがにビックリは……うん、したな。なんでお前がここに!?
目の前の女子、一色いろはは、俺から視線をパッと外す。暑さのせいか顔が赤い。
「せ……先輩……」
一色はゆっくり口を開くが、言葉に詰まっているのか、次の言葉が続いてこない。視線はあちこちをさまよい、集中しない。
久々の再開。記憶にある一色と違う態度や表情に、あざとくないリアクションを見て不覚にも可愛いと思ってしまった。久々に会ったせいかな？
「あの、せ、先輩……せっかくの再開でその格好は……無いです。ポイント低いです」
あ、俺いま下着姿だったね。
「わ、わりぃ！自分の家なんでつい…な？」
「ついじゃ無いですよ～！早く服着てください！それで後でリビング集合です！」
そういい放ち、小町の部屋に逃げるように駆け込む。
ええ……。ここ俺の家なんですけど……。
てかポイントて。小町のが移ってますねぇ…。

俺の後輩との再開は、なんかもう色々間違っている。

やはり一色いろはと比企谷小町はあざとい

「お兄ちゃんは大学生になってもお兄ちゃんだなぁ……」
「もうドン引きですねー」
　小町がため息混じりにぼやき、一色は言葉通り、物理的に引いている。
「いや、ここ俺の家だからね？てかなんでお前がここにいんの？」
「え？そんなの、お米ちゃんに呼ばれたからに決まってるじゃないですかー」
　じゃないですかーと言われましても。
　話を聞くと、小町が総武高に入学した後に知り合って仲良くなり、夏休みに小町が一色を家に誘ったということらしい。
「そうか、まあゆっくりしてってくれ」
　俺は立ち上がり、部屋に戻ろうと動く。
「ちょっ、お兄ちゃん！せっかくいろはさんが来てくれたのに！どうせゲームばっかでしょ？はい、座る！」
　ぐいっと袖を引っ張られ、よろめく。
「おっ、おい……っ！小町の客だし、俺要らないでしょ」
「あ～はいはい。意見は話が終わった後に聞きます。だから座って」
「いや、まあいいけど……。俺邪魔じゃね？」
「そんなことないよっ。ね？いろはさん？」
「そうですよーっ。むしろ先輩がいないと駄目なんですっ！」
　きゃるるんっ！とぶりっ子ポーズをする。
　相変わらずあざといなー。
「逆に怪しいんだが……。何が目的だ？金は無いぞ」
「いやそんなの求めてませんから。先輩、相変わらずですねー。こんな可愛い後輩が、家まで押し掛けてきたんですよー？」
「もう後輩じゃないけどな」
「はぁ。めんどくさっ」
　ちょっ、会って早々に酷いな!?
　まあめんどくさいのは自覚あるが。

「すみませんいろはさん。こんな兄で……」
「ううん。分かってたからいいよ？」
「扱い酷いな」
「酷いのはお兄ちゃんの性格なんだけどね」
２人して笑顔でばっさり言うなぁ。可愛くない奴らめ。
さすがに泣いちゃうよ？
小町はともかく、一色は久しぶりなんがだ容赦ない。
いやだこの子……知った仲だからって、人との距離の取り方間違ってるんじゃないかしら…。
「まあ、今日呼ばれたのは私だけじゃないんですけどねー」
「あ？まだ誰か来るの」
「はいー。誰が来ると思いますかー？」
なんかすごいニヤニヤしながら聞いてきた。
一色と共通の知人で思い当たる人物が数名しかいないのだが。
いないのだが……。いやいやまさかそんな。
さすがに来ないだろ……。いろんな意味で。
卒業以来、高校の知り合いには誰にも会っていない。一色が一人目だ。
日頃ボッチボッチ言いながら、高校では奇跡的に、魅力的な女性と知り合えた。
大学では、サークルには参加していないので、女子どころか男子とも関わりが無い。
今日の一色との再開も、内心キョドりまくっているんだが……。
さすがに心の準備がいるんだよなぁ。
「あっ、せんぱーい。いま…誰を思い浮かべたんですかぁ～？」
「いやっ、別に……」
ニヤニヤする一色から目を反らす。
ああもう！うざい！ニヤニヤした顔を近づけるな！
「……で、小町。誰が来るんだ？」
「ふふふふ……秘密だよ？」
パチンとウインクをかます妹。

普段だとあざと可愛いんだが、この２人が揃うとただただ鬱陶しいな！

話題を変えよう。

「そういや一色はまだ生徒会長やってんだなー」

「え？はい、まあお陰さまで……てか私が生徒会長になった時、まだ先輩学校にいたじゃないですか……」

「話の逸らし方が雑すぎるよお兄ちゃん……」

などと、くだらない会話をしていると、チャイム音が鳴り響く。

「あ、来た来た！」

小町が反応し、パタパタと玄関に向かう。

声と足音から察するに２人か。

「はーい。お客様２名追加入りましたー！」

小町に続いて入ってきた２人は、やはり見覚えのある顔だった。

このメンバーで集まる俺の大学生活は、やはりまちがっている。

「ひゃっはろーっ！久しぶりー！」
「やあ」
おいおい……。なんでこの２人なんだ…？
１人は、雪ノ下陽乃。相変わらず美人だな。
もう１人は……。こいつは、なんでここにいるんだ。まあ、陽乃さんに無理矢理連れてこられたって落ちなんだろうが。
２人ともスーパーの袋を持っている。まさかここで昼飯を済ますつもりなのか。
早速陽乃さんが俺に近づいてくる。
距離近いなー。あ、良い匂い。
「比企谷君、元気してたー？」
「まあ、ぼちぼちですかね…」
近づいてきた分離れる。
「ありゃ、つれない。あからさまに引いちゃって……。相変わらず可愛い反応だなぁーっ」
意地悪な顔がまた男心をくすぐってくる。大抵の男ならここで落ちているまであるな。
「この２人は小町が呼んだのか？」
「うん。陽乃さんがお兄ちゃんに会いたいって言うから……呼んじゃった！」
てへっ！と下を出す小町。
呼んじゃったのかー。じゃあ仕方ないなー。って、なるわけあるか！
「いや、俺聞いてないんだけど……」
「そりゃあお兄ちゃんに直接言ったら、絶対に会ってくれないじゃん？」
「まあな」

「先輩って分かりづらいようだけど、色々知ると逆に分かりやすいですよねー」
「何言ってんだ一色。俺ほど分かりやすい人類はいないぞ。特に今来た2人よりよっぽど」
「比企谷君、相変わらずの嫌味だねー」
俺の嫌味に嬉しそうに反応する陽乃さん。
「それで、これはなんの集まりなんですか？なんで葉山までいるの？」
もう1人の客人、葉山隼人を睨む。
「陽乃さんに呼ばれてね。比企谷もいろはも小町ちゃんも、久しぶりだね」
懐かしいようなイケメンっぷりで、ニカッと笑って挨拶をする葉山。
やっぱり予想通り、陽乃さんの金魚の糞か。
「お久しぶりですっ、葉山先輩っ」
「はいー。お久しぶりですー」
一色と小町の返事を聞いて、葉山は俺へと顔を向ける。
「比企谷は……相変わらずだな…」
「まあ、お前もな」
「ごめんねー、比企谷君。雪乃ちゃんじゃなくて。今日は用事があるらしくてね？」
陽乃さんがまた意地悪な顔で、ニヤニヤしながらこっちを見てくる。
「……いや別に」
「あれ？ちょっと残念だった？」
……もう本当楽しそうだなー。
この人はあれかな。俺に嫌がらせするために来たのかな？
いけない。また自意識過剰になっちゃって。
「……ええっと……それでー、私たちはなんで集められたんですかねー？」
一色が話の本題を聞き出そうと発言する。
なんだろう。陽乃さんの形成する独特な空気に入り込めるから、一

色はなんだかんだ大物感あるんだよなぁ。
生徒会長やってきたってのもあるが、元々の素質があったんだと、今更ながら思う。
「陽乃さん。今日は何か大事な用事があるんだろ？」
続いて葉山も尋ねる。こいつは何も聞かされずにここまでついてきたというのか？すげぇな。
「まあまあ～、焦らない焦らないっ。それより、もうお昼過ぎてお腹空いちゃったし、お姉さんがお昼作るから、話はそれからで……ね？」
「おおっ！陽乃さんの手料理！小町、お腹すいてきちゃいました！」
小町がお腹をさすりながら答える。
まあ確かに……お腹はすいたな。今朝は運動したし。
なんか妙なメンバーが集まったもんだな。
これから楽しい時間がやってくる……予感が全くしないんだが、どうなっちゃうんだろ。怖いなぁ。

雪ノ下陽乃は、人選をまちがえない。

「それで、今日は何の用事だったの？」
食事後、俺と小町で食器を片付けた後に、葉山が再び切り出す。
「ん？あーそうだったね」
一色や小町との談笑していた陽乃さんが話を中断し、携帯を取り出す。
「いきなりなんだけどさ…比企谷君。この女の子知ってる？」
携帯をこちらに向ける。そこには1人の少女が写っていた。
黒髪のショートで、中学生か高校生くらいの幼い女の子。
「……いや、知らないですね」
隣の葉山も覗き込む。表情を見るに、葉山にも心当たりが無いようだ。
「小町にも見せてくださいっ。……んん～、知らない子ですね～」
陽乃さんから携帯を渡され、画面を睨むも答えは俺たちと変わらない。
隣の一色もひょいっと覗く。
「可愛い子ですね。陽乃さんの親戚ですか？」
「ん～、知り合いの知り合いの子供の友達かな？」
「この子がどうかしたの？」
葉山の問いに、ん～～～と、唸る陽乃さん。
「家出しちゃったらしいんだけど、この辺で見た人がいるらしいんだよね～」
「はぁ……家出、ねぇ…」
何かあったかは知らんが、家を出たくなる気持ちが俺にはいまいち分からん。俺は一生家を出たくない。
「みんな見かけてないか～。年は15才くらいだったかな？」
「中3か高1か、どっちなんですか？」
「高1だったかな」
「あ、じゃあ小町と一緒ですね～。高校はどこなんですか？」
「あー、どこだったかな？忘れちゃったなぁ。友達の家にいるとかな

ら良いんだけど…ほら、最近物騒だからね」
まあ、事件に巻き込まれている可能性もあるか。
「だとすると、警察の仕事なんじゃ無いですかねー？」
一色が人差し指を唇に当てながら言う。
まあ、確かに一色の言うとおりだ。素人の出る幕じゃない。
不必要な仕事はしない。俺の教えが活きているようですね。一色さん。
まあ、そんなことは陽乃さんなら分かりきっていると思うが……。
「当然、警察も捜索中だよ？で、警察と関わりのあって、顔も広い父に話が来たの。あ、これ他言しないでね？」
「おいおい……」
ウインクしながら、人差し指を立てて、しーっのジェスチャーをする陽乃さん。
まあこの人の場合、この面子だから話したんだろうが。
葉山はもちろん、一色や小町が他に話したりはしないだろう。話したら殺されそうだしな。
当然俺は話す相手がいない。
「父も今は忙しいらしくてね？大学生で時間がある私に話が降りてきたって訳なの。あまり深追いはしない程度にって言われてるから、信頼できる人に聞いて回ってるってのが、今の現状」
「はぁ……俺たち以外に話して、情報がこの写真のみって訳ですね」
「そゆこと。理解が早くて助かるわ」
「いなくなって、どれくらい経つの？」
「5日だったかしら？」
葉山の問いへの、陽乃さんの答えにさすがに驚く。
「5日か……」
「まあまあ。あくまで見かけてたら教えてほしかっただけ。深追いは駄目って言われてるし、気にすることは無いよ」
俺の呟きに、明るく答える陽乃さん。
「私と隼人は色々動くけど、比企谷君達は気にしなくて良いから。見かけたら連絡をちょうだい」

「はぁ、分かりました」
俺が答え、一色と小町も頷く。
「じゃあとりあえず、皆ラインを教えて？」
「あ、はいー」
「小町、スマホ持ってきます！」
一色はポケットから携帯を取り出し、小町は部屋に取りに行く。
「ほら、比企谷君も携帯出して？」
「いや、俺ラインやってないんで……」
「ラインくらい、すぐインストールすれば良いでしょ？」
そう言って陽乃さんがにっこり笑う。
結局逆らえるわけ無かったんだよなぁ…。

この日は、陽乃さん、葉山、一色、あと小町ともラインを交換して解散した。

※※※※※※※※※※※※

「ってあれ？一色は帰らないの？」
陽乃さんと葉山を見送った後、何故か俺の横にいる一色に話しかける。
「え？はい。これから小町ちゃんと出掛けますので」
「あ、そうなの。てっきりさっきの話のために呼ばれたのかと思ったわ」
「あー、たまたま予定が被ったみたいですねー。葉山先輩達が来るのは今日小町ちゃんから聞いたので」
ふぅん。
考えたら小町が友達を連れてくるなんて初めてだな。
恐らく、お兄ちゃんと会わせたくないとか、そんな理由だろうが。
一色なら面識あるしな。
「小町は準備があるので、ちょっと部屋に戻ります」
「うん、わかった」

小町は一色に告げ、とたとた部屋に向かう。
俺と一色はリビングに戻る。
俺も部屋に戻ってゲームをしたいんだが、さすがに我が家で一色を1人ポツンとさせておくのは良くないからな。
しばらく無言だったが、一色が静寂を破る。
「先輩」
「ん、なに？」
一色の呼び掛けに顔をあげる。
「さっきの話なんですけど……」

「いろはさーん！そろそろ行きますかー？」

遠くから小町の声。
「うん！行こっかーっ！」
一色はハッとして、小町に答える。
「ではでは先輩っ。またっ」
あざとく敬礼をして、鞄を持ってリビングを出ていく一色。
だからあざといっつーの。
今度は入れ替わりで小町がリビングに顔だけ出してくる。
「そいじゃあ小町はこれからいろはさんとショッピングなので、留守番任せた！」
「ああ、自宅警備は任せろ」
「はいはい。じゃあ、よろしくでーすっ」
そう言って2人でキャッキャしながら家を出ていく。
あの子、一色の口癖移ってますねぇ……。
しかし、一色が何か言いかけてたが、なんだったんだ……？
まあいいや。
さて、ようやくゆっくりゲームが出来る。
俺は冷蔵庫からマッカンを一缶取って、部屋に戻った。